

去勢と動物表象——松浦理英子『犬身』を中心に

西原志保

キーワード…去勢 生殖 動物 犬

はじめに

本稿では、動物、殊に犬や猫など身近な家族としての動物における、生殖に関わるイメージの変容に注目し、松浦理英子の長編小説『犬身』（朝日新聞社、二〇〇七年）について考察する。古来、犬や猫はお産が軽いことや多産であることから、生殖や豊饒さを象徴してきた。しかしながら近年、去勢手術の一般化や、TNR運動（Trap Neuter Returnの略。捕獲し不妊手術を行い元の場所に戻し、一代限りの地域猫として見守る運動）の広まりから、犬や猫を家族として、身近な動物として愛すれば愛するほど、彼らは生殖しない存在となりつつある。

このような変化は、文学における動物表象にどのような変容をもたらしただろうか。その一例として、犬に關するエッセイ「犬よ！ 犬よ！」も参照しつつ、犬に変

身した主人公と飼い主女性との情愛を描いた松浦理英子『犬身』を考察する。犬や猫が生殖を媒介としない愛のかたちを表象しうる可能性を示唆すると同時に、主人公が犬としての当事者性を獲得する様を考察する。

一、動物と他者、自然、生殖と女性

具体的な作品の考察に入る前に、生殖と動物、女性などのように語られてきたかを、まず確認しておきたい。

近代以前の作品においては、例えば平安時代の物語である『源氏物語』において、女三の宮の寝所に忍び込んだ柏木が、猫の夢を見る場面、

たゞいさゝかまどろむともなき夢に、この手馴らし

し猫（女三の宮を垣間見する原因となった猫。かつて柏木が騙し取って飼ひ慣らし、可愛がっていた。引用者）の、いとらうたげにうち鳴きて来たるを、

この宮にたてまつらむとて、わが率て来たとおほしきを、何しにたてまつりつらむ、

(若菜下、三卷364頁)

について、『岷江入楚』に「懐妊の事也 夢獸は懐胎之相」であると注されているように、妊娠と関連づけて解釈されている。また、近世の「大経師昔曆」に

娘の心が土産ぢやと、慕はれた根性に、畜生の魂がいつの間に入れかはった。(中略) 父親さまへの毛色を産むは、犬猫ならどこにある。親は犬には産みつけぬ、猫になれとは誰が育てた

(『近松門左衛門集②』559～560頁)

とあるように、犬や猫が父親の異なる子供を産むことから誰とでも生殖するようなものとされ、さらにそれが「畜生の魂」と呼ばれている。

このような動物への見方は、最近問題になった長谷川三千子×竹内久美子「セクハラ？チンパンジーでは常識ですよ 他人の尻馬に乗るMETOO運動」が「セクハラ」は「チンパンジーでは常識」と言うように、あるいは、坂東眞砂子「子猫殺し」^②が、「獣の雌にとつての「生」とは、盛りのついた時にセックスして、子供を産むこと」とし、それを「本質的な生」と位置づけるように、現代においても女性をそのような「自然」のなかに

閉じ込めようとするレトリックにおいて、顕著に見られる。動物を自然なものとし、生殖することがその幸せであると見なし、それが、人間、殊に女性の「自然」な「幸せ」であるとするレトリックが用いられるのである。さらにこのようなレトリックは、女性が「動物と同じように」理性において男性よりも劣っていると見なされ、差別されてきた、つまり、女性と動物が同じロジックによって差別されてきたことも想起させる^③。

ところが近年、殺処分につながるような無計画な繁殖を防ぐ目的や、雌の避妊手術の場合は「子宮内膜症」や「乳腺腫瘍」、雄の去勢手術の場合は「前立腺肥大」、「精巣腫瘍」を防ぐ目的から、犬猫など身近な伴侶動物の避妊・去勢手術が一般化しつつある。「サイボーグ宣言」^④「犬と人が出会ったとき」^⑤「伴侶種宣言」などで知られるアメリカの生物学系フェミニニストであるダナ・ハラウェイ

がサイボーグと伴侶種はどちらも、人間と人間ならざるもの、有機的なものと技術的なもの、炭素とシリコン、自由と構造、歴史と神話、富者と貧者、国家と主体、多様性と枯渇、モダンティとポストモダンティ、自然と文化とを、予想もしないかたちで結びつける^⑥。

と述べるように、犬や猫などの伴侶種は、必ずしも自然な存在でも、生殖する存在でもない。伴侶種は単純な二項対立の構造を内破し、人間との歴史的な関係を見れば、互いに愛によって結びつく存在である。しかも「乳腺腫瘍」を防ぐことができるということは、アンジェリーナ・ジョリーの乳房切除手術について、卵巣の摘出が「乳癌の発症を抑制する可能性も期待できる」と指摘されるように、人間にも該当する。これは改めて、現代の（女性の）サイボーグ的な身体が、生殖から切り離されうる可能性を示すものだろう。

そこで本稿では『犬身』について、固定的なジェンダー規範と動物への見方をもとに内破する可能性を持つものとして、避妊・去勢手術と「愛」との関係を考察したい。

二、梗概及び研究史

松浦理英子『犬身』（二〇〇七年）は、「犬のように撫でられること」を至上の快楽とする「ドッグセクシユアル」という造語によって自らのセクシユアリティを説明する八束房恵が、犬となり、気に入った女性とともに生活する物語である。房恵はオオカミを思わせるバーの店主「朱尾猷」の力によって犬となり、陶芸家「玉石梓」の飼犬「フサ」となり、交流を深める。フサは梓が兄

の彬から性的虐待を受けていたことを知り、ショックを受けるが、やがて梓もそのような兄から離れようとする力をフサとの生活によって得ることとなる。梓は兄がフサを殴り殺したことで、兄を殺す。梓が三年の刑期を終えたのち、房恵は別の犬に転生し、梓と再会する。

『犬身』については、後に述べるような問題点もあるが、動物自然女性生殖という価値観を揺るがすという観点からは、重要な作品と言える。

『犬身』は、「聞わない犬」「ただの犬」の物語として位置づけられ、『八大伝』やジャン・ジュネ、ガーネットの作品など先行する文学との関係についても論じられているが、特に注目したいのが、「非性器的」で「セクシユアリティを超えた」関係を描く作品として考察される点である。例えば佐藤裕子は、「人間の男と女でもなく、男性同士、女性同士というでもない。そもそも人間と人間のセクシユアリティを超えた地点から」物語が始まること、蓮實重彦は「非性器的なトライアングルが、多かれ少なかれ性器的な結合を前提とせざるをえない家族のトライアングルに対して優位に立つことで」物語が終わることを指摘する。また、百瀬奈津美は、房恵のセクシユアリティについて、朱尾猷が

「（略）それははたしてセクシユアリティの名に値

するのか、という疑問が浮かびますね。だって、あまりにも基本的な快樂ではありませんか、撫でられて感じる気持ちのよさって。(中略) たいていの人は、(中略) 成長するにつれもっと他の快樂にも目覚めて行くものだと思うんですが、あなたには快樂の基本形しかないと?」 (82〜83頁)

と言う場面から、「撫でられて感じる気持ちのよさ」とは、「快樂の基本形」であること、また房恵がフサとなつた後に去勢されたことについて、

房恵／フサは犬であるために人間との性行為を必要とせず、牡犬となつてからは去勢され、本格的に性行為とは無縁な存在となる。

と指摘しており、基本的には首肯すべきと考える。

そこで本稿ではまず、『犬身』における、生殖や避妊・去勢手術に関する描写を抽出することで、動物を通して、物語が生殖を媒介とした愛のイデオロギーを乗り越えてゆくさまを考察する。

三、性愛から去勢へ

去勢手術の場面を見ると、飼い主である梓は様々に悩んだものの、フサ自身は「とりたてて印象的なこともなかった」と感じている。

結果をいえば、春めいて来たある日、梓はフサに朝の食事を与えないまま車に乗せ、混合ワクチンや恐水病の予防接種をもらったおなじみの動物病院に連れて行き、去勢手術を受けさせたのだった。

(中略) とりたてて印象的なこともなかった。(176頁) 飼い主である人間が考えるほど、犬になつたフサにとっては重要なことではなかったのである。また、かつて房恵と一種の友愛関係にあった久喜は、房恵との関係について次のように回想している。

八束と一緒にいるととりわけ楽でした。(中略) わたしと八束は幸いにも男と女なので、恋愛感情を抱き合っていようがまいが、結婚してずっと一緒にいることができる。(中略)ところが、八束の方はわたしと結婚する気は全くなかつたんですね。あいつは人間よりも犬に興味があつたから (294頁)

ここでは、房恵にとっては男女間の友愛的な関係よりも「ドッグセクシュアル」のほうが優先されていたことが、友愛関係の相手の視点で説明されている。非器器的な、「撫でられる」だけの関係は、単純に考えれば人間の男性、あるいは女性とであっても可能であるように思われる。それにもかかわらず、なぜ「犬」なのかと考えたとき、触感の違い、すなわち人間は柔らかく撫で心地

の良い毛におおわれていないこと、また人間は避妊・去勢されていないということが重要だろう。

ここで松浦自身が一九八五年に犬について書いたエッセイ「犬よ！ 犬よ！」⁽¹²⁾を参照したい。

性教育の先生だって犬だった。お尻のまわりの毛を赤く染めた犬や性器を充血させた犬、(中略)エロティックな愛撫と一方的で思い遣りのない触りかたと正しいスキンシップの違いをも理解した

これは「かつて町に」「たくさん犬がいた」頃のことを「犬のユートピア」として回想した文章である。一九八五年初出の文章であるため仕方のない面はあるとしても、野良犬の多くが交通事故や病氣、保健所での殺処分によって短い生を終えていたこと、仮に生きられたとしてもその生活は安息のない過酷なものであったことは想像に難くない。例えば稿者の出身地である香川県では、二〇一九年現在でも野良犬がいるが、二〇一七年度時点で、保健所での殺処分率は八年連続、殺処分数は五年連続でワーストだった⁽¹³⁾。そのような現状を踏まえれば、上京以来犬に触れ合うことの難しい生活を送っていたため実感が薄かったであろうことを差し引いても、街中に野良犬がいて自由に触れることができる環境を「犬のユートピア」と呼ぶのは呑気である。なお、松浦は愛媛県松

山市出身であり、「高校時代は生まれ故郷ではない文化不毛の小都市に住んでいた」⁽¹⁴⁾というが、四国の地方都市であれば一九八五年時点でもまだ野良犬はいたはずであるから、野良犬を見かけなくなった原因としては、上京したことも大きいだろう。

松浦はここで犬によって性愛を教えられたと述べているが、先に引用したように、『犬身』においては犬の去勢が描かれる。

牡犬となり、去勢されたフサは「性的な場面でもないのに性器を勃起させる」「甘味の入り交じった疼き」(350頁)を感じる経験などを経て、次のような感慨に辿り着く。

この上なく単純な幸福感に酔いながらフサは改めて考えた。朱尾が言うようにわたしの梓への慕情には性的な欲求が含まれていて、梓との触れ合いには性的な快感が混じっているのかも知れないけれど、もしかすると親子の間のものであれ友達同士の間のものであれ人間と愛玩動物の間のものであれ、すべての体の触れ合いの中にはあらかじめ性的な快楽の萌芽があるのかも知れない。逆に、すべての性的快楽は親子の触れ合いの快楽に代表されるような原初的な快楽を基盤として発達したものともしえるだろう

うか。性的快樂と一般的には性的と見なされない快樂が実は根本のところでは融け合っているのだとしたら、梓と触れ合う喜びの中に性的な要素が含まれているように思えたとしても騒ぎたてるほどのことではないのではないか。(433頁)

したがって『犬身』は、松浦にとって、子供の頃屋外で触れあった記憶しかなかった犬のイメージを、家庭の中で大切にされ、避妊・去勢される犬の現在形に刷新するものであっただろう。かつては犬によって性愛を教えられたが、今度は去勢を教えられたのである。なお、「犬よ！ 犬よ！」は『優しい去勢のために』と名付けられたエッセイ集に収載されている。

「犬」に託して「撫でられる気持ちのよさ」という非性器的なセクシュアリティを描くことができたのは、犬の柔らかな触感のみならず、犬が避妊・去勢手術されるものであることも大きいだろう。そしてそれは、かつて犬によって性愛を教えられた松浦が、犬によって「去勢」を教えられるものであり、かつて子供の頃に触れあった犬のイメージを、現在形に刷新するものでもある。

四、犬としての当事者性

ただし、犬を描いた作品としての『犬身』には、一つ

看過しえない問題点がある。それは「犬になりたい」とまで願っている房恵が、保健所で殺処分される犬に対してはあまりにも他人事である点である。

房恵がどのような犬になりたいかイメージをつかむために、「普通の」「日本犬」を計画的に繁殖させるために作られた「犬咲村」と呼ばれる施設を訪れる場面を参照しよう。

人間の手によって形態や性質を固定された犬たちは現在「純血種」と呼ばれているけれども、そもそも「人為種」と呼ばれるべき特殊な犬たちであり、「人為種」ではない犬たち、特に歴史的にほとんど犬種づくりのなされて来なかった日本のような風土に見られる、自然に繁殖し犬の原種の形態を色濃く残した犬たちこそ本来の犬なのだから、(中略)。

(中略) 普通の犬を計画的に繁殖させて保存するとともに、普通の犬の自然な形の魅力、普通の犬にこそ保持されている犬本来の性質の素晴らしさを、世に広く訴えかけて行くことにした——。(102頁)

これは「犬咲村」の「開園の辞」が書かれた看板を房恵が読む場面であるが、「純血種」を「人為種」と否定しつつも、「自然」な「普通の犬」を「計画的に繁殖」させることの矛盾があらわれている。さらに、日本の犬

を指す部分を「日本人」に言い換えてみれば見やすいが、ここからは、例えば秋田犬保存会などに見られる一種のナシヨナリズム⁽¹⁵⁾へのパロディや皮肉のようなものすら看取できる。しかしながら、房恵はこの矛盾には気づかず、「わたしはこの理念に賛同するけれど」(同)とごく自然に納得してしまい、物語も「犬吠村」の矛盾を追究することはない。

しかも「開園の辞」末尾には、「飼育できる犬の数は限られています」(同)とあり、「普通の」日本犬は繁殖させる、つまり未だ存在しない命を計画的に作るが、そうではない犬はたとえ既に存在する命であっても保護しないという「命の選別」が行われているのである。「(犬吠村)で働けないかな？」(103頁)と言う房恵に対し、

生きた動物を扱う仕事をする者には、動物への愛情の他に、感情に溺れず動物を処理する冷徹さも必要ですけど、あなたにたとえば園の前に捨てられた犬を保健所に引き渡すことができますか？ (同)

と言う朱尾猷の職業者の論理は、一見冷静で論理的であるが、例えば笹野頼子『愛別外猫雑記』⁽¹⁶⁾の、

『小さな命を私は救いたい』で、引用者(協力もせず度々子猫だけ持ち込み、限界に達した愛護家が

困り果てると、それなら保健所へ持って行こうあ可哀相にという人がいるのだそうだ。小野氏は「脅迫とも言える(引用)」と冷静に述べているが、(中略)。それこそをそういうものをまさに脅迫というのである。「言える」どころじゃない。脅迫ではない。「お前の子を殺すぞ」とはそういう意味だ。

(72頁)

に比べると、あまりにも単純で他人事である。松浦自身が『ファウスト』における「メフィストフェレス」と位置づける朱尾のキャラクターによるものであるとしても、この言葉にも、「動物のことになると熱くなる人間は多いですからね」(103頁)という朱尾の言葉にも、簡単に納得してしまう房恵の態度は、あまりにも他人事である。ちなみに犬は一年に二度出産し、一度の出産で中型犬であれば三〜六匹の子犬を生むため、「犬吠村」のように犬を一か所に集め人為的に繁殖させた場合、数年のうちに管理不可能な数まで殖えてしまうはずであるが、どのように繁殖の数を制限しているのかなども具体的には描かれていない。

『犬身』は犬をめぐるいくつかの厄介な問題に深入りせず、どんな立場にも立たず、表面をなぞるだけである。例えば殺処分問題や悪質なペット業者と戦うというよう

な、犬によって社会問題と関わる展開にはならず、描かれるのは人間の家族と、語り手の変身した犬と飼い主との私的な接触にほぼ限定されている。犬そのものを描きたいのではなく、犬のように「撫でられて感じる気持ちのよさ」を最も幸福なものと感じる、「ドッグセクシュアルとでも言うべき」(82頁) セクシュアリティを描くことが主眼にあること、そしてエンターテイメント的な構造を持つ作品の性質のためだろう。

ただし、そのような房恵Ⅱフサも、結末に至って初めて、自分のこととして犬をめぐる理不尽な状況に憤る。

梓が彬を殺害した後、その裁判について、朱尾とフサⅡ房恵の魂が会話する場面を見ておきたい。

「(略) おまえが殺されたのも彬が自分で言っていたように法的には器物損壊罪にしかならず、家族や恋人を殺されたのと同等には捉えられないそうだ」
「何なの？ そのペットを愛する人の感情を無視した法律は？」
(497頁)

フサという家族が殺されたにもかかわらず、梓に懲役五年という殺人罪の実刑が適用されたことに対し、フサⅡ房恵は初めて自分のこととして憤っている。「犬になりたい」と言いつつも、保健所で殺される犬などについては他人事であった房恵Ⅱフサが、結末に至って初めて当

事者性を獲得し、犬の不本意な社会的位置づけに憤りを覚えるのである。

『犬身』は、すでに指摘があるように、玉石梓がフサの死によってはじめ「魂の自由」を得た¹⁸⁾というだけでなく、房恵Ⅱフサの側からみても、「撫でられる気持ちのよさ」にしか興味のなかった彼女が初めて犬としての当事者性を獲得し、犬の不本意な社会的地位に憤りを覚える物語でもある。

それは、「ペットを愛する人の感情を無視した法律」というように、梓の感情を慮ることによって獲得した当事者性であり、そのような、「ペットを愛する人の感情」に対する彼女の確信は、主人公が実際に牡犬になり、去勢を経験し、梓とのこまやかな触れ合いによって愛情を育んできたからこそのものである。一節で述べたように、犬の避妊・去勢はそもそも、殺処分につながるような無計画な繁殖を防ぐ目的や、子宮・卵巣、前立腺・精巣の疾患を予防するために、つまり一つ一つの命を大切にするために行うものである。ここからは想像で述べるしかないが、当事者性を獲得した房恵Ⅱフサが、もう一度犬吠村のくだりを繰り返すならば、命の選別への怒りや、保健所に連れて行かれる犬たちへの共感など、また別の反応を示したかもしれない。

おわりに

以上、犬や猫など身近な家族としての動物における、生殖に関わるイメージの変容に着目し、松浦理英子『犬身』を考察した。まず、古来、犬や猫はお産が軽いことや多産であることから、生殖や豊饒さを象徴してきたが、近年、去勢手術の一般化や、TNR運動の広まりから、犬や猫を家族として、身近な動物として愛すれば愛するほど、彼らは生殖しない存在となりつつあることを確認した。

そのうえで、犬に変身した主人公と飼い主女性との情愛を描いた松浦理英子『犬身』を考察した。「犬」に託して「撫でられる気持ちのよさ」という非性的なセクシュアリティを描くことができたのは、犬の柔らかな触感のみならず、犬が避妊・去勢手術される存在であることも大きいだろう。かつて犬によって性愛を教えられた松浦が、犬によって「去勢」を教えられ、それによって描きたかった、非性的的で原初的な快楽のかたちを描くことができたのである。そしてそれは、かつて子供の頃に屋外で触れあった犬のイメージを、殺処分につながるような無計画な繁殖を防ぐ目的や、生殖器系の疾患を予防するために、つまり一つ一つの命を大切にするために避妊・去勢する、犬の現在形に刷新するものでもある。

と同時に『犬身』は、「撫でられる気持ちのよさ」にか興味のなかった房恵Ⅱフサが初めて犬としての当事者性を獲得し、犬の不本意な社会的地位に憤りを覚える物語でもある。

もちろん現代においても、昔ながらの生殖と結びついた犬・猫イメージを描く文学作品も多いだろう。しかしながら、生殖しない犬・猫イメージを描く文学作品においては、性愛によって結びつく関係とは別の愛の関係が描かれている。生殖技術の発達などによる人間の生殖イメージの変容との関わりや、ペットショップで売られる犬猫、悪質なブリーダーの下で繁殖させられ続ける犬猫のイメージなどがどのように文学作品に描かれるかも重要であると考えるが、今後の課題としたい。

* 引用は以下による。

松浦理英子『犬身』（朝日新聞社、二〇〇七年）。笹野頼子『愛別外猫雑記』（河出書房新社、二〇〇一年）。新日本古典文学大系『源氏物語』。『源氏物語古注集成 岷江入楚 第三卷』。新編日本古典文学全集『近松門左衛門集②』。

注

(1) 『正論』二〇一八年七月号。

(2) 『日本経済新聞「東京」』二〇〇六年八月一八日付夕刊。

(3) 例えば、デヴィッド・ドゥケラツィア、戸田清訳『一冊でわかる 動物の権利』(岩波書店、二〇〇三年)は、

西洋ではアリストテレスが、動物は感覚を有するが理性 (reason) を欠いており、自然界のヒエラルキーのなかでは人間よりはるかに下位にあって、(中略)。動物は理性的な魂をもっていないので、(中略)。アリストテレスはさらに、男性は推論能力がすぐれているので自然の摂理として女性よりすぐれており、精神面よりも肉体面で頑健な一部の人間は、自然の摂理として

奴隷にふさわしいとも主張した。 (4頁)

ことを指摘し、キャサリン・A・マッキノン、葛西まゆこ訳「ハツカネズミと人間 動物の権利に対する、あるフェミニストの断篇」(キャス・R・サンスティン、マーサ・C・ヌスバウム編、安部圭介、山本龍彦、大林啓吾監訳『動物の権利』尚学社、二〇一三年)は、

女性は、人間の王国における動物であり、男性の世界におけるマウスである。女性と動物は、両者とも、生物学によって、文化というよりは性質 (nature) によってアイデンティファイされている。両者とも、それによって、男性的なイデオロギーの下では、男性、人間よりも根本的に劣っているものと思われている。

男性が支配する社会において、女性は、原始的で (nature)、動物のよらぶ (animalistic)、それにより見くびられて (denigrated) アイデンティファイされており、(中略) 人間社会における動物の比較的低い地位をもまた定義付けている。 (349頁)

(4) 例えば、保健所で殺処分される犬・猫たちの写真集である、児玉小枝『どうぶつたちへのレクイエム』(桜桃書房、二〇〇〇年)には、次のようにある。

殺処分されている命の内の大半が子犬・子猫です。犬や猫は、人間のように出産をコントロールすることができませんので、そのままにしておけば発情の度に次々と妊娠・出産します。

生まれた子どもをすべて家族として育てる、あるいは里親をみつけられるというのなら話は別ですが、現実には大変困難です。殺されるためだけに生まれてくる命をこれ以上増やさないためにも、避妊・去勢手術をして下さい。

メスの場合、避妊手術をすれば、老齢になってからの子宮や卵巣、乳腺に原因する病気を防ぐことができますし、メス犬の場合、生理による出血で部屋を汚すこともなくなります。

オスの場合は、去勢手術をすることによって、発情期にメスを求めて家を飛び出し、放浪した挙句、迷子になったり伝染病や事故やケンカに巻き込まれたりするリスクが少なくなり、性格も温厚になります。また、オス犬の前立腺の病気や、オス猫が部屋のあちこちに尿をかけるマーキングなども防ぐことができます。

他には、「犬の避妊去勢手術について」の必要性、メリット・デメリット、方法、費用、時期」(『いぬのきもち WEB MAGAZINE』 <https://dog.benesse.ne.jp/withdog/content/?id=12027>、二〇一八年七月一日閲覧)、「避妊去勢手術について」(内閣府特定NPO法人Conoass(コノアス)、<http://www.conoass.or.jp/situation/castration.html>、二〇一八年七月一日閲覧)等参照。

(5) 『伴侶種宣言 犬と人の「重要な他者性」』(永野文香訳、以文社、二〇一三年、8〜9頁)による。また、

具体的な差異において、相互に著しく他者である (significantly other) わたしたちは、肉体に愛という、たちのわるい発達性の感染をあらわしている。そして、この愛は歴史的な倒錯であり、自然・文化において継承されてきた遺産なのである。(6頁)

ともある。

(6) 中島正治「アンジェリーナ・ジョリーの選択」(『月刊基金』54(7)、二〇一三年七月)。

(7) 斎藤美奈子『犬身』、聞わない犬の物語」(『文學界』二〇〇八年五月)。

(8) 辻本千鶴「松浦理英子『犬身』論——ジュネとガーネットの受容を視座として」(『言語文化論叢』5、二〇一一年八月)。

(9) 「犬尽くしのアイロニー——松浦理英子『犬身』論」(『玉藻』(44)、二〇〇九年三月)。

(10) 「ある「なだらかなあられもなき」について——松浦理英子『犬身』論」(『小説トリッパー』二〇〇七年冬号)。

(11) 「松浦理英子『犬身』論(Ⅱ)——性愛観と人間関係の到達点」(『ゲストハウス』臨時増刊号4、二〇一二年一月)。

(12) 『優しい去勢のために』(筑摩書房、一九九四年。初出『スタジオボイス』八五年一月月号)。

(13) 多知川節子「香川 犬の殺処分、8年連続全国ワースト1 譲渡は増加」(『朝日新聞』二〇一八年二月五日)。

(14) 「松浦理英子にきく51の質問」(『月刊カドカワ』一月号、一九九五年一月)。

(15) 志村真幸は「日本犬保存会のメンバー」を「かならずしもナシヨナリストであったとは考えていない」としつつも、

大正期における「日本文化への再評価」と「ナシヨナリズムが強まっていく時期」であることを、「日本」犬が脚光を浴びたこと」の一因とし（「紀州犬における犬種の「合成」と衰退——日本犬とはなんだったのか」大石高典・近藤社秋・池田光穂編『犬からみた人類史』勉誠出版、二〇一九年）、溝口元は「日本犬が忠犬ハチ公に代表され、時代的背景の下、ナシヨナリズムの高揚と報国の一つとして利用された」ことを指摘している（「忠犬ハチ公と軍犬」同書）。また、「日本」の「普通の犬」の強調は、時代的には前後するが、ネットなどで二〇一八年頃に流行した「普通の日本人」という言葉を想起させる。

(16) 引用文中で言及されるのは、小野絵里「ボクたち生きているといけないの？」（猫の手帖編集部編『動物愛護運動・8の方法 小さな命を私は救いたい』どうぶつ出版、二〇〇〇年）。

(17) 「文学インタヴュー第一三回 松浦理英子」（〈現代作家アーカイヴ〉飯田橋文学会、東京大学新図書館トークイベントEXTRA、二〇一八年二月二日）。

(18) 注9 前掲論文。

【付記】本稿は、日本文学協会第三八回研究発表大会（二〇一八年七月八日、金沢大学）において行った口頭発表「去勢と

動物表象——松浦理英子『犬身』および笹野頼子の猫小説／エッセイ群を中心に」の一部をもとにしている。当日ご意見をくださったみなさまに感謝申し上げます。

（にしはら・しほ／国立国語研究所非常勤研究員）